

感動詞の表記の変遷に関するノート（3） ——令和期におけるいわゆるライトノベルについて——

石 川 創*

Notes on the way of describing Interjections in Japanese (3) -about Light Novels in the Reiwa era-

So ISHIKAWA*

【キーワード】 感動詞・感嘆詞・字種・アクセント・イントネーション

1. はじめに

筆者はこれまで、感動詞の表記の変遷をたどるにあたり、江戸時代の洒落本・人情本および明治・大正期の文章と、大正末期から昭和30年のラジオ放送劇台本を調査してきた。その成果を簡潔に整理すると以下のようになる。

ア. 江戸時代後期の洒落本・人情本において、感動詞は8割以上が片仮名表記される。

イ. 明治・大正期における口語体の文芸を確認すると、明治初期には9割前後の感動詞が片仮名表記され、1895年の雑誌『太陽』においても、5割超の感動詞が片仮名表記される。

ウ. 19世紀末ころを境にして、急速に感動詞の平仮名表記化が進む。1901年の『太陽』では平仮名表記が約6割・片仮名表記が1割となり、1909・1917・1925年の『太陽』や、1917年の雑誌『女学世界』では8割前後の感動詞が平仮名表記となる。平仮名片仮名交じり表記も1901年の『太陽』を最後に1割を超えることはなくなり、感動詞の表記において片仮名を使用する割合が減少

していく。この傾向はその後も続き、大正末期から昭和30年のラジオ放送劇台本においても、感動詞の用例の8割前後が平仮名表記である。

エ. 感動詞の平仮名表記が広まった大正後期においても、語末促音語形の感動詞は片仮名交じりで表記することが多く見られる。大正末期から昭和30年のラジオ放送劇台本においても、感動詞全体の字種の傾向に比して、長音には特別な傾向は見られず、促音は優位に片仮名表記されやすく、撥音は優位に平仮名表記されやすい。江戸時代においては話しことば的な要素である感動詞が片仮名表記されていた¹が、その意識が、促音の表記に残り続けたと考えられる。ただし促音も、大正期以前に比べると、平仮名表記が進み始めている。

筆者の一連の研究に関連して行った研究発表²において、明治末期以降は感動詞の平仮名表記が拡大しているが、たとえば昭和中期以降の漫画作品や、平成期以降のライトノベルを調査した場合、感動詞の片仮名表記は増えるのではな

*人間総合学群 人間文化学類

いかという予測を立てた。それに基づき、本稿では「ライトノベル」について、もっとも時代の新しい令和期の作品を調査することにした。

「ライトノベル」の定義については、泉子・K・メイナードが2010年ころまでの作品の歴史や先行研究を踏まえて論じている³ほか、いくつかの立場があるが、本論では具体的な定義は行わない。次節に述べるとおり、本稿では雑誌『電撃文庫 MAGAZINE』『ドラゴンマガジン』を調査対象としたが、これらの雑誌に掲載されている作品は、メイナードが「ライトノベル専用のレーベル」とする電撃文庫と富士見ファンタジア文庫から出版されている。これをもって、本稿ではライトノベルから用例を収集した、と主張するものである。

2. 調査資料・調査方法

本稿では、ライトノベルを掲載する雑誌に掲載されている作品を対象として、感動詞を抽出した。調査資料としたのは、以下の2冊である。

オ.『電撃文庫 MAGAZINE』Vol.65・電子書籍版（KADOKAWA、2018年12月）

カ.『ドラゴンマガジン』第34巻第1号（富士見書房、2021年1月）

『電撃文庫 MAGAZINE』Vol.65は、2018（平成30）年12月に発売された雑誌であり、掲載された作品は、正確には平成期に執筆されたものであるが、同号に掲載された複数の作品が、現在も継続して「電撃文庫」レーベルから刊行されているため、今回「令和期」のライトノベルに含めて考える⁴。

上記2冊について、『電撃文庫 MAGAZINE』には14作品、『ドラゴンマガジン』には10作品の小説作品が掲載されていた。作品名が非常に長いものも多いため、以下、本稿中において使用する略称も含め、作品名の一覧を以下に示す。作品名の後には著者名と挿絵を手がけた画家名を示したが、一部作品には挿絵がなく、その場合には著者名のみを記している。

略称	作品名（著者名・画家名）
モバイル	モバイル・ソウル（新田周右・POKImari）
僕と死神	僕と死神の七日間（蘇之一行・和遥キナ）
山吹さん	幼馴染の山吹さん（道草よもぎ・かにピーム）
七つの	七つの魔剣が支配する（宇野朴人・ミュキルリア）
錆喰い	錆喰いビスコ（瘤久保慎司・赤岸 K）
はたらく	はたらく魔王さまのメシ！（和ヶ原聡司・029）
バーチャル	バーチャル人狼ゲーム（土橋真二郎・望月けい）
青春ブタ	青春ブタ野郎は思春期症候群の音を聞く。（井守千尋）
魔女と	魔女と小悪魔のお茶会（紺野咲良）
私の目	私の目を見ないで下さい（Five-month）
安達と	安達としまむら（入間人間・のん）
魔王信長	魔王信長の転生スローライフ（石動将・かれい）
乃木坂	乃木坂明日夏の秘密（五十嵐雄策・しゃあ）
野崎まど	野崎まど劇場（野崎まど）
	（以上『電撃文庫 MAGAZINE』Vol.65、14作品）
キミと	キミと僕の最後の戦場、あるいは世界が始まる聖戦（細音啓・猫鍋蒼）

デート	デート・ア・ライブ（橘公司・つなこ）
スパイ	スパイ教室（竹町・トマリ）
古き掟	古き掟の魔法騎士（羊太郎・遠坂あさぎ）
幼馴染	幼馴染をフットしたら180度キャラがズレた（はむばね・ねぶそく）
限界超え	限界超えの天賦は、転生者にしか扱えないーオーバーリミット・スキルホルダーー（三上康明・大槍葦人）
世界一	世界一かわいい俺の幼馴染が、今日も可愛い（青季ふゆ・A ちき）
ナゾトキ	ナゾトキ女とモノカキ男。（辻室翔・うなさか）
大罪烙印	大罪烙印の魔剣使い～歴史の闇に葬られた【最強】は、未来にてその名を轟かせる～（東雲立風・るろあ）
両親の	両親の借金を肩代わりしてもらう条件は日本一可愛い女子高生と一緒に暮らすことでした。（雨音恵・kakao）
	（以上『ドラゴンマガジン』第34巻第1号、10作品）

以上の24作品から感動詞を抽出した。感動詞の認定基準については、ラジオ放送劇の台本を資料とした前稿⁵を基本的に踏襲する。具体的には以下のとおりである。それぞれの基準を定めた理由は、前稿を参照されたい。

キ. 応答詞や挨拶語の類は、可能なかぎり感動詞として認定した。「はい、うん、いえ」、「こんにちは、さようなら」といった多くの国語辞書の見出しに立つ語のほか、「すいまへん」などといったくだけた語形についても用例とした。

ク. 笑い声や叫び声、掛け声などについて、「あはは」や「ヒエエーッ」、「おーし」など、国語辞書の見出しに立つものからそうでないものまで、広く感動詞として認定した。

ケ. 助詞や助動詞、補助動詞が後接している感動詞は、全体を1語とみなした。たとえば、「まあね」、「ごちそうさまでした」、「おはようございます」などは、いずれも1語の感動詞として認定した。

コ. 「そう」、「さよう」については、感動詞から除外した。

また、感動詞を1語と認定する基準について

も、前稿と同様とする。

サ. 感動詞に接続する特殊拍は、それをまとめて1語とみなす。たとえば「こらァーッ」のようなものは、1語の「平仮名片仮名交じり」表記の感動詞として認定した。

シ. 同じ感動詞の重畳形は、全体でひとつの用例とみなす。読点や感嘆符等の記号が挟まれている場合も同様である。例えば、「おいおい」や「はいはい」は、1語の「平仮名」表記の感動詞と認定した。

以上の基準に基づき、次節より「ライトノベルの感動詞の表記」について調査する。

3. 調査結果

3.1. 令和期のライトノベルにおける感動詞の字種の内訳

はじめに、各作品における感動詞の用例数と、それぞれの用例がどの字種で表記されているかを、表1に示す。各行について、上段の数字は用例数、下段の数字は「感動詞延べ語数」に対する用例数の百分率（小数点第二位以下四捨五入、以降の表についても同様とする）である。

(表1：感動詞の用例数と表記における字種の内訳)

作品名 略称	感動詞 延べ語数	平仮名	片仮名	漢字	平仮名 片仮名 交じり	平仮名 漢字 交じり	片仮名 漢字 交じり	他
モバイル	32	30 (93.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (6.3)
僕と死神	60	58 (96.7)	0 (0.0)	1 (1.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.7)
山吹さん	79	77 (97.5)	1 (1.3)	0 (0.0)	1 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
七つの	17	17 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
錆喰い	57	51 (89.5)	4 (7.0)	0 (0.0)	1 (1.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.8)
はたらく	111	108 (97.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (2.7)
バーチャル	67	65 (97.0)	1 (1.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.5)
青春ブタ	15	13 (86.7)	0 (0.0)	2 (13.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
魔女と	6	6 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
私の目	38	38 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
安達と	82	81 (98.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.2)	0 (0.0)	0 (0.0)
魔王信長	148	145 (98.0)	1 (0.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.4)
乃木坂	310	301 (97.1)	2 (0.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (1.0)	0 (0.0)	4 (1.3)
野崎まど	0	0	0	0	0	0	0	0
キミと	143	140 (97.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (2.1)
デート	133	122 (91.7)	0 (0.0)	1 (0.8)	8 (6.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.5)
スパイ	75	74 (98.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.3)
古き掟	112	85 (75.9)	8 (7.1)	0 (0.0)	17 (15.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.8)
幼馴染	139	134 (96.4)	2 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (2.2)
限界超え	88	84 (95.5)	3 (3.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.1)
世界一	100	94 (94.0)	1 (1.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (5.0)
ナゾトキ	148	145 (98.0)	2 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.7)
大罪烙印	30	30 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
両親の	103	89 (86.4)	12 (11.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.9)
計	2,093	1,987 (94.9)	37 (1.8)	4 (0.2)	27 (1.3)	4 (0.2)	0 (0.0)	34 (1.6)

「他」としたのは、「へえ」、「へへ」をはじめとする「へ／へ」（平仮名／片仮名）を含む表記の用例である。印刷物の上では平仮名と片仮名の区別がつかないため、別の分類とした。電子書籍を参照した『電撃文庫 MAGAZINE』は、平仮名の「へ」および片仮名の「ヘ」でテキスト検索をすることで、表記の字種を明らかにすることも可能だが、冊子版を参照した『ドラゴンマガジン』と字種の認定基準が異なることを避けるため、全ての「へ／へ」を含む表記について、「他」の用例とした。

表1の結果を、以下に整理する。

ス. 全用例の約95%が平仮名表記である。

セ. 片仮名を含む表記（「片仮名表記」、「平仮名片仮名交じり表記」）は全用例数の3%程度であり、当該表記の割合が10%を超えるのは、「古き掟」と「両親の」の2作品のみである。

ソ. 漢字を含む表記（「漢字表記」、「平仮名漢字交じり表記」）は、全体の1%に満たない。

令和期のライトノベルにおいては、感動詞の表記において片仮名を用いるということが非常

にまれである。一部の作者が片仮名表記をある程度用いることはあるが、もっとも片仮名表記の多い作品でも、その割合は25%を超えない。

第1節のウに示した通り、明治末期以降、昭和30年までの用例においては、8割前後の感動詞が平仮名表記されていたが、令和期のライトノベルにおいてはさらに平仮名表記が進んでいることがわかる。

3.2. 特殊拍の表記

本項では表1を踏まえ、特殊拍を含む感動詞について、その長音・促音・撥音部分が、どのように表記されているかを調査する。第1節のエで示したように、昭和30年までの資料においては、感動詞に平仮名表記が広まっても、促音については片仮名表記が多く見られた。表1の結果を踏まえれば、特殊拍についてもさらに平仮名表記は進んでいると考えられるが、その詳細について確認したい。

本稿の調査資料において、特殊拍を含む感動詞は、延べ1,225例あった。それぞれの特殊拍の表記について整理したのが、表2である。

（表2：感動詞の特殊拍に関する表記）

	当該の特殊拍を含む感動詞の延べ語数	特殊拍が平仮名表記	特殊拍が片仮名表記	特殊拍が符号表記
長音	798	593 (74.3)	8 (1.0)	226 (28.3)
促音	353	305 (86.4)	48 (13.6)	0
撥音	255	252 (98.8)	3 (1.2)	0

長音については「ええー」のように、ひとつの例に平仮名と長音符の二つが長音表記として用いられている例もあるため、平仮名表記、片

仮名表記、符号表記の合計が、延べ語数を上回る。

表2の結果を整理すると、以下のようになる。

タ. 長音について、片仮名表記されることは非常にまれである。その一方で、符号（長音符「ー」、 「～」）表記が3割弱ある。前稿で調査した、大正末期～昭和30年までのラジオ放送劇台本においては、長音を含む感動詞4,500例のうち、長音部分を長音符表記したものは178例（4.0%）であったため、令和期のライトノベルにおいては符号表記が大いに広まっているといえる。

チ. 促音について、前稿で調査した大正末期～昭和30年までの資料においては、感動詞の促音部分の表記は、平仮名と片仮名がそれぞれ約5割であった。令和期のライトノベルにおいても、感動詞の促音は長音・撥音に比べると片仮名表記されやすいが、それでも85%程度が平仮名表記であり、平仮名表記への移行が進んでいる。なお、語末促音語形（「あっ、えっ」など）の感動詞は283例あったが、その語末促音部分の表記が平仮名（「っ」）だったものは238例（84.1%）、片仮名表記（「ッ」）だったものは45例（15.9%）であり、促音全体の割合と大差がない。「語末」の促音であることを意識しての片仮名表記は行われていない。

ツ. 撥音が片仮名表記なのは3例であり、その内訳は「ノンノン」「サンキュ」という外来語が2例と、「ゴホン」が1例である。前稿における大正末期から昭和30年までの資料と同様に、撥音はほぼ平仮名表記される。

わずかに促音について、昭和30年までの資料に見られた、音声的な要素として片仮名書きを行うというなごりがあるが、表1にみたとおり、感動詞全体の95%が平仮名のみで表記されており、特殊拍が片仮名表記されることもごく少ないというのが、令和期のライトノベルにおける感動詞表記の状況である。

4. 令和期における感動詞の片仮名表記

令和期のライトノベルにおいては、昭和30年までの資料に比べると、感動詞の平仮名表記が大いに広まったということが、前節までの調査で明らかになった。

ライトノベルの表記においては、片仮名が目されることが多く、メイナードは、「ライトノベルの表記で特に目立つのはカタカナ使用で、通常カタカナが使われない表現に使われる場合である。」⁶としている。また、石黒圭の論⁷を参照しつつ、「カタカナ表記について根本的に言えることは、それが文字の表音性を高め表意性を低める機能があるということである。」⁸と論じている。

表意性・表音性ということは、感動詞について論じる際にしばしば指摘されることであり、たとえば友定賢治は感動詞の問題点について、次のように述べている⁹。

まず、感動詞に含まれるのはどのようなものかも明確ではない。「うわっ、あっ」など無意識に発音するものにちかいものから、「はい、いいえ」などの応答に用いられ、応答詞といわれるもの、「おはよう」などのあいさつ、言い淀みの「あのう、まあ」のような間投詞・フィラーといわれるものなど、ずいぶん異なる性格をもつものが感動詞として一括される。そもそも言語の重要な特徴である恣意性があるのか、特定の形と特定の意味を持つのかといった点でも疑問があり、典型的な言語記号とはしにくいものである。

このように、生理的な発声との境界があいまいであり、語そのものの実質的な意味合いが小さいものが多いということが、感動詞の先行研究で指摘されてきた。

第1節でこれまでの稿を振り返ったとおり、江戸時代後期の人情本や洒落本においては、8割以上の感動詞が片仮名表記されていた。第1節のエでも触れたが、今野真二の論を参照すると、「話しことば」的な要素を付加する際、片仮名で書くというのが当時の「漢字平仮名交じり」における「工夫」であり（注1参照）、ゆえに当時感動詞や間投助詞、発話に際して長音化した音などが片仮名で書き加えられたと考えられる。19世紀末ごろから急速に感動詞の平仮名表記化が進んだが、それでも昭和30年の資料までにおいては、音素的な要素を片仮名表記するという意識が見られた。しかし、本稿で調査した令和期のライトノベルにおいては、表音性を高めるために片仮名表記がされやすいという特徴があるにもかかわらず、約95%の感動詞が平仮名表記され、片仮名を交えた表記は3%にとどまる。

感動詞は戦後以降、平仮名表記することが一般的な指針である。1950年の『文部省刊行物表記の基準』の「漢字の使用法」では、「二 感動詞・助詞・助動詞および助動詞に準ずるものはかながきとする。」として、例として「ああ（嗚呼）」が平仮名表記で示されている¹⁰。ただし、感動詞の片仮名表記が否定されたわけではなく、2022年発行の『記者ハンドブック第14版 新聞用字用語集』においては「代名詞、連体詞、接続詞、感動詞、助詞、助動詞・補助用言、形式名詞は、平仮名を主体とする。」と解説し、具体的には、

（4）感動詞〔強調するときは片仮名書きにしてもよい〕 ああ あら いや おや
そら まあ ウワーッ ハハハ

という例を挙げている¹¹。感動詞の平仮名表記に対する強制があったわけではなく、片仮名表

記されることは、現代の用字において想定されている。しかし、少なくともライトノベルの書き手は叫び声や笑い声においても、ほとんど片仮名表記を行わない。

上記「ウワーッ」「ハハハ」について、本稿の資料における表記を確認すると、「うわ」を代表形とする用例（「うわー」、「うわーっ」、「うわあ〜」など）は19例あるが、うち17例が平仮名表記、1例が片仮名表記、1例が平仮名片仮名交じり表記である。その一方で、笑い声「はは」「ふふ」を代表形とする用例（「ははは」、「はははっ」、「ふふっ」など）については、全60例のうち、46例が平仮名表記、14例が片仮名表記であった。この14例の片仮名表記のうち、9例が「両親の」のものである。表1に示した通り、「両親の」には12例の片仮名表記があったが、その4分の3を「はは」「ふふ」という笑い声に用いており、笑い声については片仮名を用いるという著者の表記意識が見られる。言い換えると、「両親の」以外の著者は、笑い声もほとんどが平仮名表記であるし、「両親の」の著者も、笑い声以外はほとんどが平仮名表記である。

表音性を高めるための片仮名表記が特徴としてあげられるライトノベルにおいても、少なくとも令和期においては、感動詞は片仮名表記がほとんど用いられない。江戸時代の洒落本・人情本に広く見られ、大正末期から昭和30年の資料においても確認できた、話しことば的で、表音性が強調される側面をあらわすために、感動詞を片仮名で表記するという意識は、令和期においてほぼ失われたといってよい。

5. 令和期のライトノベルにおける感動詞の長音表記

5.1. 平仮名表記の感動詞における長音符の使用

第1節で述べた、現代の漫画作品やライトノ

ベルにおいては、感動詞の片仮名表記が多く見られるのではないかという事前の予想は、少なくともライトノベルにおいては正しくなかったということになったが、それでも令和期のライトノベルにおいて、感動詞に「音声的な要素」を持たせたと考えられる表記が存在する。

それが長音に関する表記である。まず、3.2.にも述べたとおり、令和期のライトノベルにおいて、長音符による長音表記は、大正末期から昭和30年の資料に比べて非常に多くなっている。平仮名表記の感動詞において、長音を長音符で表記するというのは規範的な表記とはいえず、現代の国語辞書において、見出し語に「あー」「えー」といった表記は基本的になされない¹²。

前稿の大正末期から昭和30年までの調査資料において、平仮名表記の感動詞のうち、長音部分について、長音符を用いた用例は128例、長音を用いない（平仮名またはくりかえし符号「ゝ」）用例は2,957例であった。それが今回の調査資料では、表2で示したとおり、長音符を用いた用例が226例、長音を用いない（平仮名）用例が593例となっている。

大正末期から昭和30年にかけて、平仮名表記の感動詞において長音符が用いられた例としては、「おーい」（128例中45例）がもっとも多い。これは、「おおい」（3例）や「おうい」（11例）、「おおい」（1例）の用例より多く、当時においても長音符表記の方が優勢であった例である。その他の語を観察すると、たとえば「ううん、ううむ」（「ううん、困ったなあ」「ううむ、どうしたものか」のような、応答詞でないもの）について、全38例の表記を見ると、「ううん、ううむ」（29例）、「うゝん」（2例）、「うーん、うーむ」（6例）という内訳になっており、長音符を使わない表記の方が優勢である。

本稿の調査資料において、「おーい」5例はすべてこの表記であり、「おおい、おうい、お

おい」はもちろん、「オーイ」の例もなかった。また応答詞でない「ううん、ううむ」について、全24例の内訳は、「うーん、うーむ」（18例）、「ううむ」（4例）、「ううん、ううん」（2例）となっている。

大正末期から昭和30年の時点で、平仮名表記の感動詞において、一部の語には長音符が積極的に使われていたとはいえ、全体的にみると長音を平仮名で表記することがごく一般的であった。それが令和期のライトノベルにおいては、長音を表記するために長音符で表記する例が、全体の4分の1を超えている。感動詞の平仮名表記において、規範的でない長音符を用いるということは、当該箇所の音声的な側面を強調していると考えられよう。ちなみに、前稿の大正末期から昭和30年までの調査資料において、長音が片仮名表記される「平仮名片仮名交じり表記」、すなわち「まア」や「わァい」といった用例は420例あったが、本稿の資料ではこうした表記は1例もなかった。

長音を音声的な要素として表記するにあたり、片仮名でなく、長音符を使用するというのは、現代の特徴といえよう。

ただし、平仮名表記の感動詞における長音符の使用は、さきにも述べたように規範的な表記ではない。「おーい、わーい、うーん」などはともかく、「まー、なーるほど、ありがとー」などの表記は、ライトノベルという文体によるところも大きいと思われる。今後、戦後から令和期にかけての純文学や大衆文芸などの表記も調査する必要があるだろう。

5.2. 平仮名による小書きの母音表記

長音符とともに、本稿の資料において長音をあらわす表記として特徴的であったのが、「あ、い、う、え、お」という小書きの母音表記である。

表2で示したとおり、本稿の調査資料において、長音を含む感動詞のうち、長音部分を平仮名表記したものは593例であったが、そのうちの203例が「ああ」、「さあて」、「ふうん」といった、小書きの平仮名表記であった。

前稿の調査資料である、大正末期から昭和30年のラジオ放送劇台本においては、長音部分を平仮名表記したものは3,271例あったが、そのうち小書きの母音表記はわずかに6例（「はぁ」4例、「まぁ」1例、「はぁい」1例）である。その6例は、すべて山本有三「霧の中」（昭和3年5月6日放送）¹³のものであり、他の脚本家にその表記は見られない¹⁴。また、前々稿¹⁵の調査資料である、国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』¹⁶収録の洒落本・人情本および明治・大正期の文章においても、1925年の『婦人倶楽部』第6巻第3号の加藤武雄「創作 影」に、「さぁ」が1例見られるのみである。

ちなみに、片仮名による小書きの母音表記は、「まァ」、「さァ」、「あのウ」、「ふうん」、「あれエ」、「ねエ」などをはじめとして、『日本語歴史コーパス』の明治・大正期の文章には「ァ」（243例）、大正末期から昭和30年のラジオ放送劇台本においては「ァ、ウ、エ」（計103例）による表記が一定数見られる¹⁷。

このように、昭和30年まではほぼ見られなかった、平仮名による小書きの母音による長音表記が、令和期のライトノベルにおいては非常に広まっている。本稿の資料において、感動詞の用例があった23作品のうち、19作品に平仮名による小書きの母音による長音表記が存在したことを踏まえると、著者の表記のくせというわけではなく、令和期の、少なくともライトノベルにおける一般的な表記の特徴といえる。

小書きの母音による長音表記は、語形としては規範的とはいえず、長音符と同様に、国語辞書の見出し語で「さぁ」、「まぁ」といった表記

は、基本的になされない。しかし、たとえば『三省堂国語辞典』では第六版から感動詞「あああ」（第七版、第八版では「あーあ」）が採録される¹⁸ようになったが、第七版と第八版では注記として「あああ。」の表記を示している。長音符による「あーあ」、「わーい」などと同様に、小書きの平仮名を用いた「さぁ」、「まぁ」、「ねえ」などの表記は広く許容されているといえよう。

わざわざ規範的である「まぁ」のような表記を避けて、「まぁ」と書くのは、長音符と同様に、感動詞の音声的な要素を強調するのに用いていると考えてよいと思われる。

母音表記について、通常の平仮名と小書きの平仮名との使い分けには、何らかの意図があるのだろうか。

金田純平は、文字表記と声の高さの関係について論ずる中で、「やーだよー」と「やーだよー」という表記において、「音引きの『ー』では、最後の『よ』を、高さを変えずに延ばして発音したくなります」、「小書き文字『お』が付くと、今度は『よ』の部分から『お』にかけて下がるイントネーションになったのではないでしょうか」と述べている。その上で、「『よー』が平坦に発音されやすく、『よお』が下降イントネーションで発音されやすいということには、『ー』の平坦な形状や『お』の下寄りの位置といった文字の視覚的印象が関与していると言えるかもしれません。」と考察している¹⁹。

『三省堂国語辞典』第七版の「あーあ」においては、さきにも述べたように「あああ。」の表記も示した上で、その音調について、「二番めの音（オン）を下げ、三番めの音を上げて言う」としている。こうしてみると、小書きの平仮名は、下降調や、低い拍をあらわしているようにみえる。本稿の資料においても、たとえば「は（あ）」について、相手に問い返すような場面、すなわち「は」から「あ」にかけての上昇

調と考えられる場面においては、もっぱら「はあ?」「はあ!」といった表記であり、小書きの「あ」を用いた「はあ?」「はあ!」の用例はなかった。

ただし「ええ」について、驚きの声を上げるような場面では、ほとんどが「ええ(っ)」の表記であったが、「ええっ!」(「はたらく」, 「Kindle for PC」にて閲覧, 位置 No.2331)の用例もあり、上昇調で発音されると考えられる場合にも、小書きの平仮名表記は用いられている。下降調をあらわすために、小書きの平仮名表記がなされていると考えられる用例は少なくないが、小書きすなわち下降調というわけではない。

これは昭和30年以前の片仮名による小書きの母音表記においても同様であり、前稿の調査資料であるラジオ放送劇台本を見ると、亀屋原徳「父親」(昭和14年9月20日放送)に「いいよいいよ生れ在所だもの、なァに不自由なことも寂しい事もない。」²⁰という小書きの「ァ」表記があるが、この「なァに」は、「な」を下げながらではなく、上げながらのぼし、そして「に」で下がっていると考える方が自然であろう。かつての片仮名表記、そして令和期の平仮名表記において、小書きの母音表記は特定の音調を表現していると断ずるまでにはいたらず、音声的な要素の強調として用いられているとみなすのが穏当な結論である。

参考までに、国立国語研究所による『現代日本語書き言葉均衡コーパス』²¹においては、平仮名による小書きの母音表記がなされた感動詞の用例は、1970年代においては、「へええ、そんな時、どう打つのです?」(山崎豊子『不毛地帯』, 新潮社, 1978年)の1例しかない²²が、1980年代、特に後半になると、「さあ」、「ねえ」など、多くの用例があらわれるようになる。昭和30～50年代の表記については、今後詳細に

調査する必要があるが、平仮名による小書きの母音表記によって、感動詞の音声的な要素を強調することが広まったのは、1980年代、昭和末期以降のことではないかと推測できる。

6. おわりに

本稿では、令和期のライトノベルにおける感動詞の表記について調査した。令和期のライトノベルに関する調査結果と、前稿までを踏まえた、感動詞の表記意識の変遷に関する考察を整理すると、以下のようになる。

テ. 感動詞の約95%が平仮名表記される。大正末期から昭和30年の資料においては5割程度が片仮名表記されていた促音も、85%以上が平仮名表記である。感動詞の話しこたば的な要素をあらわすために片仮名で表記するという意識は、令和期においてはほぼ失われている。

ト. 平仮名表記の感動詞に、長音符を用いることが広まっている。規範的でない表記によって、音声的な要素を強調していると考えられる。

ナ. 平仮名による小書きの母音表記「あ、い、う、え、お」によって、感動詞の長音を表記することが広まっている。昭和30年までの資料においてはほぼ見られなかった表記であり、戦後以降の新しい現象といえる。下降調をあらわすために用いられる場合も多いが、それにあてはまらない場合もあり、音声的な要素の強調のための表記とみなすことができる。

次稿以降においては、本稿の調査結果や考察が、「ライトノベル」という文体によるものでなく、令和期において一般的にいえることであるのかを明らかにするために、令和期の純文学や大衆文芸、あるいは漫画など、他の文体の用例を調査する。また、昭和30年から平成期の感

動詞について未調査であるため、当該年代の用例についても、あわせて調査する計画である。

注ならびに参考文献

- ¹ 今野真二『漢字とカタカナとひらがな 日本語表記の歴史』（平凡社新書，2017年10月），pp.140-141などの記述による。
- ² 石川創「感動詞の表記意識の変遷に関する一考察」（早稲田大学日本語学会2021年度前期研究発表会，2021年7月3日）
- ³ メイナード，泉子・K『ライトノベル表現論 会話・創造・遊びのディスコースの考察』（明治書院，2012年4月）。以下，本稿の注では書名を『ライトノベル表現論』と省略して記す。
- ⁴ なお、『電撃文庫 MAGAZINE』は Vol.71（2020年4月）をもって休刊している。
- ⁵ 石川創「感動詞の表記の変遷に関するノート（2）——大正末期から昭和30年までのラジオ放送劇台本を資料として——」（『駒沢女子大学研究紀要』第28号，2021年12月）
- ⁶ メイナード『ライトノベル表現論』，p.181。
- ⁷ 石黒圭『よくわかる文章表現の技術 V 文体系編』（明治書院，2007年10月）
- ⁸ メイナード『ライトノベル表現論』，pp.181-182。
- ⁹ 友定賢治「感動詞」（日本語学会編『日本語学大辞典』，東京堂出版，2018年10月），p.191。
- ¹⁰ 文部省調査普及局国語課編『文部省刊行物表記の基準』（文部省，1950年9月），p.3より。国立国会図書館所蔵の資料（請求記号：811.56-M753m）を、『国立国会図書館デジタルコレクション』（<http://dl.ndl.go.jp/>）にて閲覧・確認した（「個人向けデジタル化資料送信サービス」対象資料）。「^x（嗚呼）^x」の「^x」印は「当用漢字表にない字，同音訓表にその音または訓が認められていない字」であるこ

とを示す。

- ¹¹ 一般社団法人共同通信社編著『記者ハンドブック第14版 新聞用字用語集』（共同通信社，2022年3月），pp.107-108。
- ¹² 後にも挙げる『三省堂国語辞典』では，第七版以降に「あーあ」，「そーお」，「んーん」などの項目がある。注18も参照のこと。
- ¹³ 日本放送協会編『NHK 放送劇選集』第一巻（ラジオサービスセンター，1957年3月）に収録されている。
- ¹⁴ 「ちえ（っ）」の用例はあるが，この小書きの「え」は，長音をあらわすものではない。
- ¹⁵ 石川創「感動詞の表記の変遷に関するノート（1）——洒落本・人情本および明治・大正期の文章について——」（『駒沢女子大学研究紀要』第26号，2019年12月）
- ¹⁶ 前々稿におけるコーパスの情報は以下のとおりである。
国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html#share（2019年6月19日確認）
国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス 江戸時代編 II 人情本』https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html#ninjo（2019年6月19日確認）
国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#zasshi（2019年6月19日確認）
国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス 明治・大正編 III 明治初期口語資料』https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#shokikogo（2019年6月19日確認）
本稿執筆時点における，最新のコーパスの情報は以下のとおりであるが，本稿で示した洒

落本・人情本および明治・大正期の用例・用例数は、あくまで上記の2019年6月19日に確認したものである。

国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス 江戸時代編 洒落本』 <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#share> (2022年10月21日確認)

国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス 江戸時代編 II 人情本』 <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#ninjo> (2022年10月21日確認)

国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#zasshi (2022年10月21日確認)

国立国語研究所 (2021) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 III 明治初期口語資料』 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#shokikogo (2022年10月21日確認)

¹⁷ 243例中235例は、『女学雑誌』第394-402号(1894年)に掲載された、岩野泡鳴「悲劇 魂迷月中双 一名、桂吾良」のものである。

¹⁸ 見坊豪紀ほか編『三省堂国語辞典』(三省堂)。第六版は2008年1月、第七版は2014年1月、第八版は2022年1月発行。

¹⁹ 金田純平「文字表現の音声学」(定延利之編著・森篤嗣・茂木利伸・金田純平『私たちの日本語』, 朝倉書店, 2012年2月)。引用はpp.61-62より。

²⁰ 日本放送協会編『NHK 放送劇選集』第二巻(ラジオサービスセンター, 1957年3月), p.32。

²¹ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>について, コーパス検索アプリケーション「中納言」(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)を利用して検索した(最終確認2022年10月21日)。

²² 終助詞の「～なあ, ～かあ, ～ねえ」などを

含めても, 平仮名による小書きの母音表記は42例しかない。